房総常磐植物地理概

故　田　代　善　太　郎

昭和16年

9月2日　京都発—東京着

9月3日　佐貫町海岸林=海岸砂丘たる亀田の大呼国有林及附近の部落林を見る、鶴嶺八幡宮の社叢にアラカシ、ウラジロガシ、イタビカヅラあり。

9月4日　那古及高島の樹林を調査

9月5日　清澄山—ガクアヂサヰ目につく、タマアヂサヰ多し、浅間山を見る。

9月6日　小湊山及笠森附近調査

9月7日　勝浦→銚子に至る、八幡崎方面ハマカンザウと思わるるもの多し、タマアヂサヰ、ガクアヂサヰあり、マサキの型大きいのを見る。植物の平凡甚だし。銚子泊。

9月8日　鹿島神宮及諏訪村海岸を見る。

鹿島の植物相の特異なるものあるに気づく

9月9日　大洗—水戸—阿波山

9月10日　御前山国有林（那珂郡沢山村）を見る。水戸泊

9月11日　千波湖畔—村松村真砂山海岸林

9月12日　大甕神社、大津海岸林—平潟

平潟に於ける神社々叢の樹林、シヒノキが全く王座を占む他は之にタブ、モチノキ等を加ふるなり。

9月13日—14日　木戸川国有林調査（木戸事業所泊）

木戸川に沿うて上る、植物の多くは南部的にて地理研究上の趣味を感ず。

9月15日　磯部村国有林調査

9月16日　広瀬国有林（田村郡滝根村）調査

○房　總

今回の旅行では房総地方から常磐地方にかけて特に沿海地方を一通り見た、前者は二、三度見たことでもあり知友の研究も聞いて居るから其の植物地理に就いて概論を記述して見ることにする。

まづ房総の暖地性植物につきて考うるに、房総のそれは近く伊豆をうけてほぼ類似したる様相を呈し幾分かは余勢を常、野の内域に及ぼして居る。一体暖地性植物と云うのは大東亜海流の影響による熱帯性植物若しくは、之に随伴する植物であり、其の分布は固有日本に於ては九州は南方島嶼のそれを受けて稍多く、之を四国、近畿に伝え続きて更に尾、三、遠、駿や伊豆に伝える、其の間に多少種類と発育との相違があるも大差なくほぼ相似たりと言うてもよろしく、ただ種類に漸減あるのみ、伊豆は殆んど之を集めて相、武に其の支脈をみる、房総は之を承けたりと申してよろしく多少の相違は後に之を述ぶべし、我の分布段階を異にする所以である。而して同地域にても其の位置、海の内外、地形、地質及方向、南地への距離の差異によりては海流の影響もちがい植物の形質は一様ではない、房総地域内でも方面によりて異り安房国内にても南部と外海側とは他に比して植物の著しい相違がある所以である。今その実例を挙げんに鴨川町の南に横たわる山脈にては暖地性植物其の他に顕著なる相違あり其の分布地限をなすもの多し其集団地は小湊より清澄山彙にかけて帯状をなす上総の勝浦とほぼ相同じく、大東崎までは同一域をなすものならん。之を暖地性植物の北上限界をなす段階の種類より考うれば此の段階は次の段階をなす常磐植物に比すれば其の種類に於て格段のちがいなり。就中其の顕著なる目標を代表するものは木本にてはハマヒサカキ×、（大海村）オホイタビ×、草本にてはハマユウ×、ハマナタマメ×を択ぶべし、ハマヒサカキは海気をうくる岩壁にあり其の量少きも日本以南の地にては分布の範囲ひろし。オホイタビは此の地方にも海岸林より内域に分布す其の範囲広く量も亦多し。ハマユウは潮流を受くる外海側の砂浜に限りて之を産す、ハマナタマメ（勝浦にも）はほぼ之と同じく分布はひろし。一体に暖地性植物は南部に其の種類多く発育よろし、今小湊より清澄山其の他に産する注意すべき分子を挙ぐれば、

喬本性木本にてはバクチノキ、ヲガタマノキ、（未見）ホルトノキ×、リユウキウハゼ、クスノキ×、タイミンタチバナ、ヒメユヅリハ×、クロバヒ、モクコク、センダン、ウバメガシ、イヌマキ×（我未だ多量に発育する所を見ず）等なり。クスノキは房南に限らず諸所に自生を見るが如し、ウバメガシは栽植の如くセンダンまた逸出と見るべし。山林にバリバリノキ、イチヰガシ、アブラギリを見るもさして大木にあらず、シユロの野生状と思わるるがあり。

灌木性のものにて注意すべきはマルバチシヤノキ、イヌビハ×、ハチヂヤウキブシ、オホムラサキシキブ、オホバヤドリキ×、ヤナギイチゴ、コシキイチゴ、ダンチクがあり、ダンチクは自生か否かはつきりは断定しがたし、マルバチシヤノキは房総の北部にのみ見られる、諸所に其の群生を見る。

蔓木性のものでは最も注意すべきは、オホイタビ×が安房南部にのみ産することで、之は前段は述べたるが如く此の段階の目標として重要なるものなるハマユウに

×は目標植物

同じ、両者とも安房南部に限つて産するは相似たるも前者は生存に温度と海気の影響を必要とし之は温度に条件を有するのみなり。なお、ほぼ同一の地域或はやや広く北して産するものにカギカヅラ、サカキカヅラ、ホウライカヅラ、シタキサウ、フウトウカヅラ、オホバウマノスズクサあり、終りの二者は低山地帯(此の地域)に広く産するにより目標植物として適恰なり。暖地性草本として此の地域に産するものはハマユウ、ハマナタマメの外にも多々あり、イハダイゲキは大海村にありしも絶滅したと伝う。ワダンは分布の範囲狭きにより注意すべし。ミヅキンバイ、クロタマガヤツリの内域に及ぼすは亦注意すべし、其の他にボタンバウフウ、アシタバ、モロコシサウ、イハダレサウ、コナミキ、サツマスゲ、ハマスゲ、ヒゲスゲ、ヒトモトススキ、シホカゼテンツキ、イツヤマテンツキ、マルバツユクサ、スキセン、ヒナノシヤクジヤウ、ハナメウガ、フウラン、ニラバラン、ナギラン、コクラン、クモラン、カシノキラン、ダイサギサウ、ナゴラン、いかにも多い。

羊齒類には、カタヒバ、ヌカボシクリハラン、シラガシダ、オクヅルシダ、イシカグマ、ホウビシダあり。

以上はいづれも此の段階を分布の北限とするもの多し、主として房総の南域に産するもの、即ち安房と上総の一部沿海丘陵地とにあるものであるが、之を延長して地形及び地質の連続より考えて両常野の内斜側を同一区系の植物域であると思うてよろしからん。即ち広意の房総分布段階である。此の範囲は利根川等の流域であるから之は生ずる内域の代表的植物を広く合せて得らるる区系はまことに当然である。之を東京湾植物段階と称するも可なりである。我は其の概観の一班をあらわすのみ資料の調査なお細説すべき程度に達せず、此の記事を草するに留める。

次には房総暖地性植物段階のやや普通品とみるべきものにつきて叙すべし、其の内にはなお北上するものもあるも此処にて終るものも少しとせず、喬木性木本にはヤマモ、イチヰガシ、ツクバネガシ、ムクノキ(大木)シキミ、タブノキ、ヤブニツケイ多く、カゴノキ、リンボク、クロガネモチ、サカキ、カクレミノ、リウキウマメガキ等はよく発育しセンダン、アブラギリ、灌木性にはセンリヤウ、イヌビハ、ミソナホシ、ヒトツバハギ多くイヅセンリヤウ多くカヂイチゴ、シマシヤリンバイ多し、栽植品にて注意すべきはビハ、柑橘類、ナツメヤシ、カイコウヅ、蔓木性にはオホバウマノスズグサ、フウトウカヅラ、ムベ、キジヨラン、ジヤケツイバラ、イタビカヅラ、サネカヅラ、草本にてはハマナデシコ、ツボクサ、アシタバ、ワダン、アゼトウナ、ツハブキ、ヌマダイコン、セイコノヨシ、ソクシンラン、ニガカシユウ、羊齒にてはコモチシダ、シヅワラビ、シシラン、ハコネシダ、ヒトツバ、クリハラン、ホソバカナワラビ、キジノヲシダ、オホバノハチジヤウシダ

房総に於ける南方系植物要素

此の地域内に於ける南方系要素には邦内に分布の普遍なるものと一部に極限するものもあり、普遍なるものは多くは南北に亘りて広く之を産し、北は仙台地方或は東北、稀には北海道にも及ぶものあり、一部に極限するものは之によりて小区系を劃すべく、此地方植物地理研究上興味あり注意すべき要素なり、今其の普遍なる木本の種類を挙ぐれば、

クロマツ、アカマツ、ヒメコマツ、モミ、ツガ、カヤ、ネヅ、ヨグソミネバリ、イヌブナ、アラカシ、エノキ、ケヤキ、ツクバネ、フサザクラ、ヤマカウバシ、クロモヂ、マルバウツギ、マルバシヤリンバイ、オホウラジロノキ、イヌザクラ、ザイフリボク、カマツカ、オボフヂイバラ、ツルシキミ、タラエフ、イヌツゲ、マユミ、サハダツ、ヤマシバカヘデ、イロハモミヂ、ムクロジ、ウラジロサルナシ、オニシバリ、ナツグミ、ヤマボウシ、ハナイカダ、バイクワツツジ、ヒカゲツツジ、ヤマガキ、サフタギ、エゴノキ、ヒヒラギ、マルバアヲダモ、ヲカイボタ、フヂウツギ、ゴマキ、ミヤマウグヒスカグラ、テリハガマズミ、カウヤバハキ、ナガバノカウヤバハギ、イブキビヤクシン、

或る地域に極限するものは、それぞれに植物地理上の意味を有するにより注意すべきである。之にもなお地域の大小広狭に次第あり、ミツバツツジ、ミヤマウコギ、オホバイボタノキは外帯地方にあり、九州につづくオホバヤシヤブシ、シバヤナギ、カヂイチゴは同じく範囲を小にして東海道地方にあり、マメザクラ、オホシマザクラは更に狭し、ハコネウツギ亦同様なるものの如し、各地方の海岸等にあり、裏日本には目だつものあるも自生なるかを疑う。タマアヂサヰは本州の北中部にあり特殊の分布をなす、アヂサヰの原種とみるべきガクアヂサヰの此の地方より豆相にかけて産するは興味ある顕著なる事実なり、キヨズミミツバツツジ、キヨズミイボタ更に分布の狭きが如し。

草本にも同様に普遍なるものと局在するものとあるが今は顕著なるものを挙げる。普遍なるものにヒメキンポウゲ、ナガバノイシモチサウ、ヤマホヅキ、カシハバハグマ、テイシヤウサウ、リウナウギク、フヂバカマ、ハンクワイサウ、ホンゴウサウ、カンスゲ、オホテンツキ、コウキヤガラ、マヤラン(成東附近)ビロウドラン、カヤラン、ヤウラクラン、ツチアケビ

(北海道まで)ヒメノヤガラなどがあり、局外するものにては名花ヤマユリが主として本州中北部の表側にあり、ホトトギスは阿波より紀勢志をつつけて東海に及ぶ。

アセドウナは更に広し、アシタバ、ワダンは狭く東海に存するに過ぎず。

北方系植物にては木本にハイネヅ、ハコヤナギ、バツコヤナギ、オニグルミ、アサダ、ハンノキ、ヤマハンノキ、カシハ、カツラ、ホホノキ、マツブサ、ケヤマザクラ、ウハミズザクラ、アヅキナシ、クサボケ、コゴメウツギ、フヂ、ドクウツギ、アヲハダ、ウメモドキ、ヤマモミヂ、ナナカマド、ケンポナシ、ヤマブダウ、シナノキ、コクトヅル、ハリギリ、コシアブラ、ミヅキ、カンボク山高からざるを以て多くは普通品なり。

草本にはラセイタソウ、オホミゾソバ、ウラジロアカザ、ハマアカザ、クサボタン、ニリンソウ、サラシナシヨウマ、ヒロハクサフヂ、ハマハタザホ、タニセリモドキ、コケリンダウ、ミヅガシハ（成田）ムラサキナミキソウ、ムシヤリンダウ、ウンラン、タウオホバコ、アヅマギク、ハチヂヤウナ、ホロムイサウ、ヤブレガサ、エビアマモ、リウノヒゲモ、ヒゲモ、ハマニンニク、（大東岬以北の海岸には多きも以南には見出されず）

ハマカンザウ、スカシユリ、カタクリ（成田）ウテウラン、ハマハナヤスリ（東海岸片貝附近）ヒロハクサフヂ、東海岸側に限るはおもしろし。

タニセリモドキの東海岸によることおもしろしムシヤリンダウの分布の限界せらるるもおもしろし。

○常　盤

◎御前山國有林　東茨城郡沢山村

該国有林は海岸を距ること稍遠きを以て、顕著なる暖地性植物少く木本にては前記カシ類の外にヤブツバキ、サカキ、リンボク、シロダモ、ウチダシミヤマシキミ、イタビカヅラ、キヅタ、テイカカヅラ、ツタウルシ、ツルグミ位のもので針葉樹にモミ、カヤ、イヌガヤ、ヒノキ、アカマツがある。クスノキ科にはシロダモの外には落葉灌木があるのみである。他に暖地性にてなお注意すべきはイイギリ、シラキ、コヂキイチゴ、ジヤケツイバラ、テリハノイバラなり。

南方系にて分布上注意すべきは、イヌブナ、イヌザクラ、フヂキ、オホバアサガラ、ヤマガキ、ケンポナシ、キササゲ（逸出か）オホモミヂ、ナツグミ、タマアヂサキ、ニシキウツギ、ゴヒツチヤギ、ヒカゲツツジ、バイクワツツジ、トウゴクミツバツツジ、オホフジイバラ、イハウメヅル、カウヤバハキ、ナガバノカウヤバハギあり、カウヤバハギは同株に異株を生ずるを以て生態上の興味をひく、又正倉院御物の玉箒の材料たるを以て知らる現に之を箒として使用するは此の山麓の阿波山及び伊予の松山なり。

北方系山地の分子は、ハコヤナギ、ヲノヘヤナギ、バツコヤナギ、サハシバ、アサダ、ハルニレ、アヅキナシ、オホウラジロノキ、ヤマモミヂ、ミツデカヘデ、イタヤカヘデ、カツラ、サイカチ、オホバマンサク、ツクバネ、オホヤマザクラ。

草本にて分布上注意すべきものは南方系にてはイヌシヨウマ、トリアシシヨウマ、アカシヨウマ、チダケサシ、ミシマサイコ、ツボクサ、レモンエゴマ、アキギリ、ヤマタツナミソウ、ハダカホホヅキ、キツネノマゴ、カシハバハグマ、シウブンサウ、タイアザミ、ヒメガンクビソウ、ハヒチゴザ、カンスゲ、ホウチヤクサウ、ホトトギス、ヌリワラビ、アメヅタ、シケチシダ、イタチシダ、北方系にてはアカソ、サラシナシヨウマ、ホド、ジヤカウサウ、オホヒナノウスツボ、タマブキ、クサソテツ。

◎村松海岸の植物

南方系木本中暖地性植物にて注意すべきものはモクコク、ユヅリハ、シヒノキ、アカガシ、シラカシ、タブノキ、シロダモ、サカキ、ヒサカキ、モチノキ、イヌガヤ、ハマゴウ、ムベ其他にてはヤマザクラ、ヤマガキ、ヒイラギ、カウヤバハキ、オホフヂイバラなり。

南方系草本にては暖地性のものにマルバアカザ、イヨカヅラ、ハマスゲ、ビロウドテンツキ、ヒアフギあり多くは海岸に近し、以外にては南方系の分子にオホウメガササウ、ノヂトラノヲ、リウノウギク、イナカギク、ノハラアザミ、テフセンガリヤス、エビネ、ベニカヤラン、ヤウラクランあり。

北方系の木本には寒地性の沿海植物にハヒネヅ、ハマナスあり。其の他にシラカンバ、ケヤマザクラ、ヤマモミヂ、バツコヤナギ、ドクウツギ、レンゲツツジ、ナツハゼ、ヤマブダウアリ、草本にては、沿海性のものに、ハマハタザホ、ウンラン、ハチヂヤウナ、シロヨモギ、（南限）スカシユリあり其の他にてはキバナハタザホ、カセンサウ、ヤナギタンポポが注意すべきである。

◎大甕神社及び泉神社々叢、大津浜―平潟、勿来関地方の注意すべき植物

南方系の暖地性植物にも木本にクロマツ、アカガシ、シラカシ、シヒノキ、エノキ、タブノキ、シロダモ、オホシマザクラ、センダン（大津―平潟）モチノキ、マサキ、ヤブツバキ、サカキ、ヒサカキ、ハチヂヤウキブシ、ヤツデ、アオキ、アセボ、ヤブムラサキ、コバノガマズミ、イタビカヅラ、サネカヅラ、テ

リハノイバラ、ツルグミ、テイカカヅラ等と草木にイヨカヅラ、ツハブキ、ハチヂヤウススキ、コモチシダ、オニヤブソテツ、カニクサ等の草本とあり、其の他にはヒノキ、クヌギ、ヤマザクラ、ウラジロノキ、ヒヒラギ、タマアヂサヰ、ヲカイボタ、サイコクイボタ、カウヤバハキ、オホフヂイバラ、ヤマガシユウ等の木本とアキギリ、カシハバハグマ、タイアザミ、ツルヨシ、タチドコロ、ヤマユリ等の草本とあり。

北方系の木本にはハヒネヅ、ヤマナラシ、ハンノキ、ウハミヅサクラ、ケヤマザクラ、ハリギリ、ハシバミ、コゴメウツギ、ミツバウツギ、ナツハゼ等あり。

草本にはラセイタサウ、ヒロハクサフヂ、マルバタウキ、ナミキサウ、ウンラン、ハマギク、コハマギク、ハマニンニク等あり。

前記の植物に村松地方沿海植物とを合せて考うれば沿海地方植物一班を察知するを得べし。

◎木戸川國有林

該国有林は阿武隈山系の中央部よりやや北偏すれど下部は海岸まで迫るが故に植物は沿海性のものより内陸のものまでを保ち、此の辺の山林自然の状態を見るを得べく磐城東部地方の代表的山林というを得べし、我等は一方面を瞥見したるに止まり山頂と山麓の海浜地方を究めずしかも晩秋季にて草を見ること少かりし故踏査は不充分なるもなお他と比較考察をなすに亦、足れりとすべし、尤も木本につきては曩に富岡営林署の調査せる冊子あり、まづ暖地性植物につきて考察すべし。

此の地方は常磐分布段階の北部を占むる所であり前段階で止まり此の段階に及ばざるもの甚だ多かりしは今までに記述したる通りであり、此の要素に目ぼしきもの乏しく平凡なるを免れず、また此の山彙の海岸地方を見ざりし故暖地性植物等は木草のしらべもれが相応にあらんと思わる。今常磐段階及び以北の段階の暖地性木本をあげてみるに、イヌガヤ、カシ類、×イタビカヅラ、×シキミ、×サネカヅラ、タブノキ、シロダモ、カラスザンセウ、イヌサンセウ、ユヅリハ、×シラキ、マサキ、ヤブツバキ、ヒサカキ、イイギリ、キヅタ、アヲキ、アセボ、フヂウツギ、テイカカヅラ、ヤブムラサキ、クサギ、多くは此の段階に止まるものであるが、或は本州に止まり、また北海道に及ぶ。（×印は出色の分布とみるべきなり）草本にはアシカキが山麓にあり。ツハブキ、ハマボツス、コモチシダ、オニヤブソテツの分布如何を知らず。

次に此の地域に於ける南方系植物につきて述ぶべし、此種の地理的分布につきて之を暖地性植物の分布段階と比較して考察すればほぼそれ等と相似たるものあり房総暖地性植物分布段階に於ては南方系植物が暖地性植物と共に多きもここに止まりて以北に及ばざるが相応にあり、随つて常磐段階に於ては暖地性植物が少なくなると共に南北系植物も少くなる。而して其の幾分が此の段階に止まり幾分が本州の北部に及び又北海道に及ぶかは興味ある問題なり。概して之をいえば仙台地域、即ち阿武隈川河口より塩竈湾地方に止まるもの寧ろ多し此の地域は自然に分布の一区劃をなすものなり、これ等の分子は北系分子の分布と共にフロラの重要なる分子をなすものである。今木草につき注意すべきものを挙げん

木本＝モミ、カヤ、イヌブナ、ヨグソミネバリ、ヤシヤブシ、ツクバネ、フサザクラ、タマアヂサヰ、ウラジロノキ、オホモミジ、メウリノキ、メグスリノキ、マルバカヘデ、ナツツバキ、ヤマバウシ、ハナイカダ、ゴエフツツジ、トウゴクミツバツツジ、ネヂキ、スノキ、オホバアサガラ、フヂウツギ、ヲトコヨソゾメ

草本＝ミヤマタニソバ、クリンユキフデ、イヌシヨウマ、アキギリ、フクワウサウ、ナガイモ

羊齒＝ヒメノキシノブ、ハコネサウ

此等は常磐区域の前後に亘りて分布するものであるがなお北方に地域をひろめて発育の旺盛なるものがある。ブナノキ、コナラ、クヌギ、コモチシダ、オニヤブソテツの如きは其例である。

北方系の木本は此の山地としては少しとせざるも殆んど普通品にて、之に接すること多かりし故特に之を記さば、なお注意すべきは、ヲノヲレカンバとクロウメモドキ、アブラツツジに止まる、草本も同様にて、カラハナサウ、ミヤマイラクサ、オクヒキヲコシ、ヤハズタウヒレンを挙ぐれば足れり、羊齒類にはシラネワラビ、ミヤマシケシダ、ミヤマイタチシダ、クジヤクシダ、ナラヰシダ、クサソテツ、イヌガンソクのあるのを注意すべし。

◎磯部海岸林

磯部海岸林には南方系木本にオホフジイバラあり、又ナガバヤマザクラと思わるるものあり、北方系にはホツツジの磯浜にあるなり。草本には本州東部に多き南方系のものにアザミあり、マルバアカザあり、北方系の海浜性寒地植物にセンダイハギ、シロヨモギ、ミヅギク、ヒラヰあり暖地性植物を減じたると反比例するものと云ふべし、海浜性植物はむしろ北地的なり。

◎滝根村広瀬国有林

広瀬国有林を其の一部を通過したるにすぎざるも此の地域は阿武隈山彙の中央部にあるを以て植物の種類には木戸川国有林に加えて多く、且つ注意すべきものあり。海を離るること稍々遠く南北方両系統の分子を

（p.60へ）

(p.51から)

混ずるも寧ろ南方系を多しとす。草本に於て特に特に然り。(×印は注意すべき植物)木本にはヒガンザクラ、チヤウジザクラ、シナノキイチゴ、オホウラジロノキ、クロカンバ、ウグヒスカグラ(三種)の南方系あり、カヘデにはオホモミヂ、ヤマシバカヘデの二南方系とカラコギカヘデ其の他の北方系あり、北方系のクロウメモドキとハルニレとは木戸川国有林と共に之を有す。次に草本につきて之を見れば其の種類は割に多い方である。南方系の山地普通品は常磐地区に分布して之に止まり、或はやや北するが相応に多く、而して北方系の注意すべきものが却て多し、前者にはミヤマハコベ、ミヤマタニソバ、キケンシヨウマ、アカシヨウマ、ミツバツチグリ、ヒカゲミツバ、タチガシハ、アキギリ、イヌヤマハツカ、オホカニカウモリ、ノハラアザミ、ハバヤマホクチ、イハタケサウ、テフセンガリヤス、ウチハドコロ、ミヤマクマワラビ等を挙ぐべく、レンゲシヨウマ、オヤリハグマ、オクモミヂハグマ、ヤハズタウヒレンは本州の中北部に分布する特殊の植物なり後者にはルキエフシヨウマルキエフボタン、ツルキケマン、ヤマブキシヨウマ、ミヤマタニタデ、ダケゼリ、アマニウ、オホヒナノウスツボ、ガンクビヤブタバコ、ハネガヤ、シユロサウ、エンレイサウ、オシヤグジデンダ、クサソテツ、シノブキノデ、ミヤコベニシダ、ワウレンシダ等を挙ぐべし。